

巻頭写真 日本植生史学会の創立に貢献した人々

Some important contributors to the foundation of the Japanese Association of Historical Botany

日本植生史学会は、1986年2月24日、植生史研究会という名称で創立した。実は1982年4月5日、植生史研究談話会として産声を上げたとも言える。この談話会を第1回として、1986年の研究会創立後の談話会を第5回としており、この認識では1982年にすでに活動を始めたことになるからである。このことは記録に留めておくことにしたい。

この号は創立30周年記念の特集であるので、ここでは創立にかかわった人々や場面を中心に写真を拾い集めた。大阪市立大学の粉川昭平先生と粉川研究室、東北大学の相馬寛吉先生、学会創立の発起人と発起人会、「植物化石展—メタセコイアと三木茂コレクション」に集まった事務局メンバー、これらをもって巻頭を飾ることにした。

植生史研究談話会は日本生態学会第29回大会の自由集会として開催し、事務局は粉川研究室に置いた。スタッフは粉川昭平教授と助手の私だけで、院生は南木



写真1 1982年3月当時の粉川研究室。左より2人目から粉川昭平、辻誠一郎、南木睦彦。

睦彦氏一人だけだった。談話会は1982年4月5日に開催されたが、数日前の研究室の様子が写真1である。左から2番目が粉川昭平先生、右隣が私で、その後ろが南木氏。植生史研究会創立後も事務局は粉川研究室、辻研究室、田村研究室へと受け継がれ、1996年4月に千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館へ移動するまでの20年以上にわたって、事務局会議は基本的にここで開催され、事務を担ってきたことになる。この間、大井信夫氏、能城修一氏、小島夏彦氏、百原新氏、半田久美子氏らがここで活動し、研究会を盛り立てた。松下まり子氏も博士論文のためにここに通った。粉川研究室は植生史研究会の拠点でもあったと言えよう。

東北大学の相馬寛吉教授は、私が学部学生から師事した花粉学者であったが、「花粉分析学なんてものはない。花粉、種子・果実、木材がそれぞれ個別の概念に縛られてばらばらに研究していてはだめだよ。同じ土俵に立って議論できる場を作ろう。いくらでもサポートするから」と言って後を押された。第1回談話会を大阪で開催した直後の4月14日付けの書簡では、「機会を見つけてどんどんやってください。何らかの形で記録を残すようにしてください。ぜひ学会誌といったかたちで発表するよう努力してください」と激励いただいた。研究会創立の大きな原動力となった。さらに、相馬先生は「植生史」という用語とその英文訳の生みの親でもある。1986年5月17日付けの書簡で「植生史なる内容を Historical Botany とした次第、我々の話し合いしたイメージが一番近そうに思った次第」とある。写真2は、1990



写真2 1990年3月の退官記念祝賀会での相馬寛吉先生。